諸國奇談

# 東遊記

四

特別
ル3
3983
4

113
3983
4

宮城県図書館

# 東遊記巻之四

邨瀬不知

越中越後の堺より親不知子不知といふ所あり陸
道第一の難所とし人のまゝ通し難中
三山乃裾北海へ迫る所より市振といふ駅より
すぐといふ所迄と山の中に称して二里半あり三山
の裾なる海より断崖絶壁にして路程も多くて殆
波打際と称へ海へ迫りたる中にて一方も壁浅き
いとゞ高き山一方は大海なれば風なく波静かなる



(99-1004)

船人通ずる通幅七八間或ハ十間ヲあり又ハ五
六丁一丁しある所あり絶る所風起る波荒き時ハ
歩ふ波絶壁の上へ波打かけく通路なり右二里ばの
うちに一ヶ所ばかり人子の居る所ハ幅狭き所あり成
共ふ新ふ知子ハ知らぬふ所ハ絶壁にて新もるとふ
よいと面白しといふ所ハ出佐称しまりくと生間
絶壁の根ハ岩穴ありて十間程つゝ空く其穴いくつ
もあり波の打ちる時ハ人穴へ走る入く
波の引時ハ人穴ハ走る又波来ハ次の穴ハ入て



見ハ逃てくらく此風強き時ハ数日と居るとい
通ずる事ハ出しまり年ハ越後の商人越中ハ越
るとて出ふと手程ふ所ハ中程ハ波風強
強くまり併の穴ハ通入るハ穴深く大浪打て
走る見べき深かく八日ハ
風ハ吹つゝ命なるの所ハ穴ハ出ハ其間の饑渇ハ
堪ひふハ初ハ波ハ強き日ハ
ハ穴中ハ通ハ見て
る人ハ年ハ多き事ハ

波風はさのみ強くもなく上の山は傾くばかり
降る雨雲は浪は足とり言葉は甚だ恐しく
よ寄せた余り支那山の佐伯某が少し通ると
ちょうど肩裏より持ち人足二三千人まで散
裏を手伝ひ人足は浪を避けて
付近の人足は浪を避けて
まず付近の人夫大勢と共に舟は大海の浪風
は洋々として水しぶきは山の麓



ちょうど人夫ある所を船村と云ふ又波打際を
けは動揺すると云ふ所は波風強き時と云へども
山の根に波打つ所通路なり絶壁の中ほど
と穿ちて細き所を分け人通路を間繰り
いも馬を牽かるるに成程に高く馬は高
の澤ちょうの峯まで高く馬は高
絶壁ちょうの船村より一里半ほど青海という所
あり山を山を
青海まで中里の正路雖下ちょう風波の時は王候の郷しか

[illegible]

あくいぶるの要害の地なり故に市振の関屋にて関の戸を
閉て人を通る条醫者にて無変なり風に吹るゝ味
あるき落ちもあるべし仮寝の一方は海一方は山風
の吹山南の五(数十里)迄吹通しつゝ通り
天隆よりかくれとなべて[illegible]の[illegible]
[illegible]明うして波[illegible]なる日は[illegible]
[illegible]波[illegible]
[illegible]



義経乃笠

[illegible]の[illegible]源九郎義経兄頼朝の怒りに逢ひ身の
[illegible]ふるき[illegible]古[illegible]
[illegible]奥州[illegible]
[illegible]岩[illegible]
[illegible]越[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]ふ仏家を奥州の領地[illegible]ものを[illegible]
陽ぐ者もあり[illegible]各初て安堵して[illegible]
[illegible]作り山伏の姿も[illegible]遠方より[illegible]山伏の姿
解[illegible]仏法の民神の社[illegible]結び[illegible]
[illegible]各の[illegible]社[illegible]
[illegible]人[illegible]仏[illegible]義経主従の[illegible]
[illegible]七つ[illegible]社[illegible]一の宮[illegible]秘[illegible]
[illegible]を[illegible]の[illegible]人[illegible]
[illegible]寛[illegible]



[illegible]奥羽の二州に入る[illegible]所[illegible]の関の[illegible]
[illegible]の関所[illegible]地勢[illegible]
[illegible]
中[illegible]天然の険絶[illegible]
[illegible]
[illegible]
越中越後の境に俗に親知らずと名付る
[illegible]仏法越中に山の禁の海中に流れ[illegible]
[illegible]険岨[illegible]故に人も仏所を御領

地こそ市振といへる関所を過ぎて佐渡の人と共に
北陸道の国々なれども東の限りなれば堺の
関といへるなり　世の人乃ち歩を
扱きて越後の国へ越後の国界に嵐が関といへる
見き海辺なる山より切りて葡萄峠といふ有りて此山中
なる小き関敷あり此羽越の界も実に天嶮なり
高き所なれども生羽の秋田領と奥州
津軽領の界に矢立峠といふ有り此所も番所の関有
なりて出入甚厳重也　元天橋小路なり　此二ツの所と隔

絶の天嶮と云へし　義経いふ事の武勇なれ
ども此地とあるべき奥州へ入ると聞へ
うつ坂の関矢立峠　奥州の名湖の名所
奥なれば通りに及ぶべきの二ケ所
北陸道なれども新道なれば平坦
なき事なれば道ふべき道
平坦の加賀越前だけ
さいふまでもなきまぎれ小差なく越えくく嵐
関と出羽の地ハ羽州の地なれば懐に入ある心地ぞ

しあらん什こそ侍らふ所を氣関とぞ云へく古七里は
るゞ圍まで八里の所を安達ヶ原と云ひ安達ヶ原
しもおほくとぼくおはする所を笠介くとぞ云へる所七つあり
寅まるかも十二人の俗を山伏と云へる所を数の宮
らぶるふるかとぞ云へる所を又秀衡の古城跡平泉
の中尊寺より堺井古帝の笠ヶ崎と云へる所一
所まろ七人の宿を世と云瀬りて笠森おろし
堺井おハ行きて見れば奥州まで見ひ初めし

胡沙吹



ふさふらぶ曇りの空人陸奥乃帳夫ふハ人を狀の夜
の月什千八百家のしあるまりしこ伝ふまでく帳夫
人を稱くの寺御あるまりしこ云碁中ヨロしう響のでられ
りのと吹出しく或ハ敵小遠ひ又ハ猛獸よ為るを耐
什碁とて我身と思しく碁盤とのうるく中あり長
コサ吹といふこ又武蔵ヶ帳夫人ハの皮と巻て笛
と造りしこと吹こと云コサ吹即胡笳ヶ
笛琴ヶ山乳を動き聲りて月も早ること不興成ヶ
半しく思ひしく今京北沢よ移びくを張と合点り

元菊の無体風吹ぎる日八ツ時の過より羽
ちゝ山風打吹頃ハ海辺渺茫事よ起り居宜しき潮
くゝて晴天白日なれども未だ波おゝ　又外ヶ浜迄八極
浪の底なるゆゑよりや海氣者よ空濛として雲の彩ら
ぐゝ　松島迄乃海市も平常海霧ニ多くして所の
佳景なるも無度極風よりのぶ事あら見とモやとい
ふ共ゝて羽州より津軽の迄ハ京の気色ニ万とん
遠ひゝ事ハ至極の晴天ゝ山ゝも京の色ハ
てきくふく白ゝ晴ゝてぐんゝ日色ハ高し

青天白日とりふる色もあり浪
華より中田公超代二三年代秋田より有る位の舊相撰なり
しふ昏し匂ひ甚せり武日産えんそう奴僕の古さ猶ぞん
の法麗し　竹竿よりけ有り中四尺と拾
て代色の中の色る仍ちとをんあ戒世ちるもの二三尺
乃へるふ秋天晴朗の時しるもはひよ梨花ほうし
き色代又すを極の結ち日代でく白ちちぞろ
なり天色ちよる美なるとおちるふ分ずやちひ
余ハ只増の遠ゆ色の時ちるあふるしのちちひ拾



しう光ちう浸色と年てえるふ実ふ中四う絹のく
しち代遠ざかくあるとハ場く帳美拾方ハ陰風ふ
烈変胡壁市ふ帰ふ沙ふ胡沙吹ふハ暮くるやせん
ちうしもうべくもぞく津軽秋田辺ち北よ面し
くる地面有陰風ち基し南部の拾ハ小極ち法の
度数ハ大越同　しまちるとどる東向の拾ちるふ
日月の色もやのふしも風ち　地九中四箴円
る拾ふかつくぞふ　しる宮たちハ拾ちふハ加賀越
中しも遠ふ北へ知ちるもちるふ反而賀

越ってつも暖氣なるがごとし千南き方角よりて
氣候もおだやかなるなり又秋田城の辺乃村民乃
子供腹木七皮のごとく皮乃下の木の皮をもくまなく
巻く吹すのあり甚だ少甚大ずの見物紙の遺製る
ものなるべしこれ一つ携へ帰りたくも思ひし
も生涯寄物の手きをいとひやそこう思ひ留まりぬ

藤樹先生

先生ハ俗称中江る右衛門ひく江州大溝の在中
小川村の産なり分部侯の領地の百姓王陽明
流の学者なりしが其徒行近時の学者の乃ぶ
ものあるべしとぞ思ふる先年系図一本あり尾
州の一士人男本あるく代遠とぞ先生の墓所
小川村なるとぞ畑うの農夫より尋しる畑道
是ハ知るべし南一巣門一くまくん一て先生ハ
ひく江もく小き巣会ものるとり一ひせ治人
とて出よ乃やうておもを尋ねて書の彩色を
へあり布の小袋の根織と者ろう彼士人弱るきて

ねゝ丁寧なる男うふ美ごとに教へ人げくすゝとバ猶
迷ふとふと思ひしかうら墓所よりくゝぬ彼農
夫竹垣の戸と開さいぐ入つゝて御ゝ敬ゝいひて
客間八戸外より伏せろう士人大よ驚きて拝ハ長髪を
改名せゝ我名ハあゝで先生と敬ゝるゝて
あゝりるゝ花も海ハ薮樹の中に小筋の着て
やあゝと問ハ方ハいだ出さで代村の着ハ一人
として先生の出恩と海ゝざる云ゝ親ばらや
まひとゝくゝむ来ゝ我ゝさまゝ人ハゝ先生



の出を落なきい出ゝ中ゝ紙文
毎も書ゝとゝ人ひのあゝと知る士人も初ハ只ゝ
ざりゝ一見の仏ゝ農夫ゝ代農夫ゝ
ゝ代ゝ見ゝ仏もあゝゝ初んゝ
て知りあゝゝ家服後ゝく村井氏ゝ親
く来ゝゝにある日村井かゝう御ゝ
初九ゝ白い浜ゝ墓稲ゝ代ゝの紅光御
の方ゝゝ江州ゝ賀ゝ
ゝ一用中ゝ

出くるこの御当家の御領分に中江藤樹といへ
ひし人ありしよし此書ぞまさしく其手跡なりとい
ひ伝へしよりもやゝ評判出しより彼人体を改めん
藤樹先生の御手跡ハ我父祖以来尊敬いたし
て老父我を愛せるゆゑある當方へ向くまゐるに
ゆゑ兼ねて秘蔵の一軸を出しくらべさせぬに
所望なりしハ人せずとして奥に入り後腹に
路の一軸を携へ出くる是をうけ近寄て
あやしみぬ其その筆数かくなるものたくひハ我もなれあり



ひそかにおもしろくしてねんごろにやうね分部侯に
あんくる事畢竟領地の一農夫なるとかくまで
敬せらるゝ事代ゝ賢を察し徳を尊ぶゆゑ
とゝもの雅く又藤樹先生も真の大儒なるを
もちひんぢく知らぬとやさきにし此二本寿
はりあぬるハ此所より川原あり是ハ蓋をもて渇し溝
堂を一見せずしてよりひく大溝の東の加茂にハ
ふかより東へ入る事八丁ほどに小川村といふ裏
また老婆もくてもよはしくを教へ建ふるもあく

て講堂の北より西方にくぐりあるもの
あり志村周助とゝふ醫者の住へ事門して講
堂我あるしの家にいり入るにまづ玄関（とうぬ
といふ草鞋ぬげなるもの只うちぬぎて講堂の東
西ときいどゝ浄くいとぎのあるとおもはるさく
やかるとゝ仏菩薩抑ほりなど解て玄関（とうる
より周助の迎ふ口ずからの無礼あり茶碗なるの
茶話も移ぬきいたるを案講堂とゝなづ紙をも
ねしく敬出ゝ周助奥より礼拝と書く講堂

の浄とゝるより拾いぐまあり多とこゝ引連く沢く祖師堂
前刑さしゝる仏堂ハかゝぬきゝて間数四間あり千手院
東面ゝ十五畳ハ榛ゝもうゝ命ふとゝ拝金あり
仏ゝ沢ハ溝堂ゝ次射宮の号八畳ゝ床あり沢
拾畳ゝ目次ゝ所ゝ正面懸側のゝ藤樹書院
ゝいふ四畳の襖あり今部昌年書ゝ行う十畳
の号ゝ朱子白鹿洞の規則と板ゝ書ゝ掛ける
さゝ沢ゝ遠乃号風ゝ仏文ゝ沢ゝ孫
結ゝ号乃拾入の内ゝ浄衣ゝ省せる絵像ゝ新変

の時乃宗[illegible]厨子あり其内に神主の位牌を
先生姓中江諱原字惟命号顧軒称藤樹先生
慶安元年戊子八月廿五日卒葬邑東北玉林寺の
ふし八字あり第の内の神主書法のごとし相恵[illegible]
[illegible]ら周助宅へ度ひいらるゝとハかく此堂を[illegible]
[illegible]の父祖代々門人[illegible]
[illegible]ハ先生の孫也[illegible]
[illegible]父[illegible]
[illegible]村氏と集[illegible]論語[illegible]



[illegible]又[illegible]秋の秋葉[illegible]村中第
[illegible]も基成[illegible]
[illegible]講堂の[illegible]
[illegible]
[illegible]先生の[illegible]
[illegible]伊藤の大洲侯の[illegible]先生の先世松
[illegible]洲[illegible]先生
[illegible]
[illegible]

既よりこれを見るに、[illegible]書残出し、探ねて大洲
と思ひ出く、[illegible]て、遂に[illegible]
く罪せ[illegible]亜に江州へも[illegible]降に京都に
[illegible]て、仮姑あるしがえまを考へ[illegible]
[illegible]を[illegible]罪し[illegible]
なほりあ[illegible]海と[illegible]
[illegible]後、諸国の諸侯より招きあること[illegible]
[illegible]結末の振[illegible]人の無沢と[illegible]
[illegible]て死去あり、後より四十[illegible]の講堂の建



も死去二三年あるのち、先生の嫡子伊豆常省
先生に称[illegible]の病なりしうち、寿[illegible]
[illegible]人[illegible]中江氏の[illegible]絶え今[illegible]
射馬の家中[illegible]
[illegible]の[illegible]
近郷に[illegible]小川村の[illegible]
[illegible]者[illegible]
[illegible]酒[illegible]
特[illegible]

いへどもあまのいさりしほに代辺の風俗温和
穏やかにして又ふかく感ずべき物あり遠きすど
ころの前の屋張肥後の物語あるべきまでと知る
無沢氏をいとこの門人ちゑ功績といへばいふべき
ものもなくおのづから其人も今世にいにしへ
ゆきぬる世人藤樹先生を後ひまなく初めて
ふる其人加賀より武州江戸へ帰り来る
家へ帰りて江州河東郡より桂屋の馬とやとひ
榎本の宿より河東郡へ帰り馬のはなを



ひきとり鞍を解しふ鞍のかしらに紙布一つ生り枝
あり人見ハ人を乱りあり大よ鞍ときくの形
御のうを志ハ一たるこうこ大よ鞍ときくの形
つくりきに鞍脇の泊りる所に鞍通し鞍
鞍向ふ遠ハ遠ハ其人金銭をしハ花
脚ハ乱しくきの者のこうみくるの如して
あ人の仏石あるとうを生し馬をこ
和尚をまたまたこの恩

中くらゐの少人ちんづくりあるじもそなたの品
まづかたのももしく海と陸ふる馬方大ぜい
しかるに銀をかくしかの人金とうあくよ銅のふたの
仏しゝふしあるべきとそなたにたゞふたゝまこと
ら人ゝもさらに文ぶしてゆんとする所やむこ
とをなど拾あしく角しゝみあしふしこゝ
陸くゝ角くしてはりふを今武者とかしせあて
見ゆるを我公の拾びるもい文のふべしたゝく
一ゝを彫金もゝ戸ゝ陸今者もい彫くゝと



拾をゝ〻紀成ゝ〻ふゝ陸ゝ仕金文戸彫ゝ
い文ゝあゝ文ゝ角先ゝ陸ゝかゝえゝ戸ゝゝふ神
ゝゝも御礼とゝあるハ我公あゝたゝゝて餘成
ふくのゝゝ人ゝゝゝゝゝる国武者文とゝゝ
後中ゝむゝき西成ゝ近近ゝ拾ゝる男拾ふゝ
ゝハ我ゝるゝき渋ゝ拾ゝ清ゝゝゝゝゝゝ
ゝ酒成ゝ甚家ゝ人ゝ拾ゝ我ゝ碑彫ゝ
ゝゝん成御ゝ感ゝ塩ゝ拾ゝゝゝゝゝ
ゝハいゝゝゝ人ゝゝゝ成ゝ向ゝ名ゝ者ゝ

は又伝一つ知る者にあらざれば只我在所のをとこ
小川村より西行の付村よりとらふ人なり
て夜ごとに僧人とつふしあり某も初ふし初く
少行うしろに新ふき者なとはくまし〻人を大切
よするものゝ人のあきなえぬものゝ事は道い初
ふへうずるぞつる事堂に法をのふよりつらの
金子も我物よあらざれば立つて程をと初し
迷のこゝろとひとつに帰りぬ在郷ハ之よう
京へのぼりつうの宿ふるまひ拙も世話い事ハ平



いさのびて名方おも身面ところなりぬとて有し
世事とそりく伝るに新ふし甚家社妻ふ無沢
法帝八四金子のぼり居く学文修行最中のるな
ゝしバ付初語談吟てもくるを孫の儒とらふのく
こて年和五日ものに紀州よりの小川村と号て随従
と新ものに人を数よりつき孫の学徒ふしてもち
よ随従とゝ初ゝ玉りに無沢ゝ初ゝ
二月之間茂樹の門よりぶみて神ゝ茂樹の老
如是我聞毒ゝ老国へ帰をせよとあり

故いかゝとうたてゝ因へ人はひに帰来の矢物とせ〳〵
ちゝうゝ甚長茅樹と倚ゑゝう招きまひしを
分まゝ病身なりゝ辞〳〵門人無沢〳〵ふも
の有り内後ゝも立へき者まゝとゝ無沢と玉さと
ゝゝいづゝゝ松ゝの半ども去和語ゝ井ど蔵
樹先生の車行ゝくゝゝゝゝゝ人もゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ江州ゝ移ゝ人ゝ必彼講堂
見ゝべきゝ

阿古屋松

実方中将の墓所ありしとぞ所々屋の松の月
八奥州と申しまして今は当時の内に属して山形の城
下より神の方へ二里ばかりと隔てたり
鳥海山と云て松島に次ぐ名山なり
の陸奥国に蔵ふ国出羽国と云て
面白き松島の月日あやめの帝の御宮なり
是山形あたりの婦女子あるいは布
はたり織りて必人に売
於人情しく人小間小布を人言て昔を



尋ねとうあらて住果しなるいつの世かたりん毎乃
月にくもに雲に雪に松ばかりなりしく見ハ
ふるきあとさしてかの女ふるものをうぐいす
自らの名々もくもるを持ものもなし只家者なる者
の持しと云実も昔絵の書なる女はあ
る宮もどる市女笠きて草のうづきあるふ
者者あるうぐいす
すべく奥州筋ならハ者
人の妻女と家者ふもなるとうふ

よべくのうすき月の雲にいとゞ
あくるを待ぶ

東遊記巻之四終